

雄治はゆっくりと頷いた。

「女の人からの相談だ。この手の問題は一番苦手だ。」

色恋沙汰だな、と解した。雄治は見合い結婚だが、お互い婚礼の日まで相手のことをよく知らなかったという話だ。そんな時代を過ごしてきた人間に恋愛問題を相談する方が非常識だと貴之は思う。

「適当に書いとけよ」

「何言ってるんだ。そんなわけにいくか」雄治は少し怒った声を出した。

貴之は肩をすくめ、腰を上げた。「ビール、あるんだろ。貰うぜ」

雄治の返事はないが、冷蔵庫を開けた。2ドアタイプの旧式で、二年前に姉の家が買い替えた時、それまで使っていたものを貰ったのだ。この前に使っていたのは1ドアだった。昭和三十五年に買った代物だ。貴之は大学生だった。

ビールの中瓶が二本冷えていた。酒好きの雄治は冷蔵庫からビールを絶やすことがない。昔は甘いものになど見向きもしなかった。木村屋のあんぱんが大好物になったのは、六十歳を過ぎてからだ。

まずはビール瓶を一本取り出し、栓を抜いた。さらに食器棚から勝手にコップを二つ出し、卓袱台に戻った。

「親父も飲むだろ」

「いや、今はいらん」

「そうなのか。珍しいな」

「解答を書き終えるまでは酒は飲まん。いつもそう言ってるだろ」

ふうん、と頷きながら貴之は自分のコップにビールを注いだ。

考え込んでいた雄治が、ゆっくりと貴之の方に顔を巡^{めぐ}らせた。

「父親には女房^{にようぼう}と子供がいるらしい」いきなり、そういった。

はあ、と貴之は口を開けた。「何の話だ」

雄治は、そばに置いてある封筒を摘んだ。

「相談者だ。女性なんだが、父親には妻子^{さいし}がいるんだ」

やはり意味がわからない。貴之はビールを一口飲^{ひとくち}んでから、コップを置いた。

「そりゃそうだろう。俺の父親にだって、妻と子供がいた。妻は死んだけど、子供は生きている。この俺だ」

雄治は顔をしかめ、苛^{いらだ}立ったように首を振った。

「わしの話なんかはしてない。そういう意味じゃない。父親ってのは、相談者の父親ではなく、子供の父親だ」

「子供？ 誰の？」

だから、と雄治はもどかしそうに手を振った。「お腹の子供だ。相談者の」

えっ、とってから、ああ、と納得した。

「そういうことか。相談者は妊娠してるわけだ。で、相手の男が妻子持ちなんだな」

「そうだ。さっきからそういつてるだろう」

「言い方が悪いんだよ。父親って言われたら、誰だって相談者の父親だと思うだろ」

「それは早合点^{はやがてん}というものだ」

「そうかな」貴之は首を捻^{ねじ}り、コップに手を伸ばした。

「で、どう思う？」 雄治が訊いてきた。

「何が」

「何を聞いてるんだ。相手の男には女房にようぼうと子供がいる。そんな男の子供を孕はらんだわけだ。どうすりゃいいと思う？」

ようやく相談内容が見えてきた。貴之はビールを飲み、ふうっと息を吐いた。

「全く近頃ちかごろの若い女は節操せつそうがないな。おまけに馬鹿だ。女房持ちと関わって、良いことなんかあるわけない。何を考えてるんだ」

雄治は渋面じゅうめんを作り、卓袱台ちゃぶだいを叩たたいた。

「講釈こうしゃくはいいから、どうすればいいかを答えろ」

「そんなことは決まってるんだろ。墮おろすしかない。他にどういう答えがあるんだ」

雄治はふんと鼻を鳴らし、耳の後ろかを搔かいた。「お前にき訊いたのが間違いだった」

「何だよ、どういう意味だ」

すると雄治はげんなりしたように口元まを曲げ、相談者の封筒を手でぼんぽんと叩いた。

「墮おろすしかない、他にどういう答えがあるんだ — お前でさえ、そんなふうにいうんだ。この相談者だって、まずはそう考えただろうさ。その上で悩んでるってことがわからんのか」

鋭い指摘に貴之は黙り込んだ。確かにその通りだ。

いいか、と雄治はさらにいった。

「墮おろした方がいいということはわかっているとこの人は書いてい

る。相手の男が責任を取ってくれるとは思えないし、女手ひとつで育てるとなれば、この先、相当苦勞するだろうと冷静に見極めている。その上で、どうしても産みたいという気持ちを捨てきれない、墮ろすことなど考えられないといっているんだ。どうしてだか、わかるか？」

「さあね。俺にはわからんよ。親父にはわかるのか」

「手紙を読んだからな。この人によれば、これは最後のチャンスらしい」

「最後って？」

「この機会を逃せば、自分が子供を産むことはないだろうということだ。この人は前に一度結婚していて、どうしても子供ができないんで病院で診てもらったら、子供の出来にくい体質だとわかったそうなんだ。医者からは、子供は諦めた方がいいとまで言われたらしい。それが理由で結婚生活もうまくいかなかったみたいだ」

「不妊症ってやつか」

「とにかくそういう事情だから、この人にとっては最後のチャンスってことになるわけだ。ここまで聞けばいくらお前でも、墮ろすしかない、なんて簡単には答えられないとわかるだろう」

貴之はコップのビールを飲み干し、瓶に手を伸ばした。

「言ってることはわかるけどさあ、やっぱり産むのはやめた方がいいんじゃないか。子供がかわいそうだろ。きっと、苦勞するぜ」

「だからそれは覚悟していると書いてある」

「そうは言ってもなあ」 貴之はコップにビールを注いだ後、顔を上げた。「だけど、それ、相談って感じじゃないな。そこまでいうな

ら、もう産む気だぜ。親父がどう回答しようが、関係ないんじゃないか」

雄治が頷いた。「かもしれん」

「かもしれんって……」

「長年悩みの相談を読んでいるうちに分かったことがある。多くの場合、相談者は答えを決めている。相談するのは、それが正しいってことを確認したいからだ。だから相談者の中には、回答を読んでから、もう一度手紙を寄越^{よこ}す者もいる。多分回答内容が、自分が思っていたものと違っているからだろう」

貴之はビールを飲み、顔を歪^{ゆが}めた。「よくそんな面倒臭いことに何年も付き合ってるな」

「これも人助^{ひとだすけ}けだ。面倒臭いからこそ、やり甲斐^{がい}がある」

「全く物好^{ものず}きだな。だけどそういうことなら、考える必要はないだろ。その人は産む気みたいなんだから、頑張って元気な赤ちゃんを産んでください、とでも書けばいいじゃないか」